

**減肥,夏肥廃止が温州ミカンの樹勢,収量
および果実品質におよぼす影響について**

山田正純

1. 温州ミカン果実品質向上の一手段としての施肥量の節減および夏肥廃止が樹勢,収量および果実品質におよぼす影響を知るため,県下各普及所当たり 1 試験園,計 6 試験園を設定,1969~'73 年の 5 年間施肥改善展示試験を行った。

2. 各試験園に標準区(各地区の標準施肥設計,施肥は春,夏および秋の三期に施す。N 成分は春に年間施肥量の 45%,夏に 20%,秋に 35%を施す),夏肥減量区(夏肥不施用,かつ夏肥分だけ減肥,N の分施割合は春に 55%,秋に 45%),夏肥不施用区(夏肥不施用,夏肥分は減肥せず,春,秋の二期に分割施用,N の分施割合は春に 55%,秋に 45%),の 3 区を設けた。

3. 各試験園の 1 試験区当たり樹数は,大川:4 樹,小豆:5 樹,高松:5 樹,綾歌:6 樹,仲多度:4 樹,三豊:10 樹,とした。

4. 各試験園の 10a 当たり年間 N 施用量の 5 か年平均値(夏肥減量区を除く)は,大川:22.8kg,小豆:23.4kg,高松:20.8kg,綾歌:20.7kg,仲多度:25.3kg,三豊:22.5kg,夏肥減量区は,大川:18.9kg,小豆:18.6kg,高松:18.4kg,綾歌:16.5kg、仲多度:20.3kg,三豊:18.0kg,であった。

5. 試験開始前に試験園の土壤断面調査および化学分析を行い,終了時にも土壤化学分析調査を行った。生育調査(発芽期,開花期,新梢停止期,緑化完了期,着花状況,樹冠容積,樹幹周,樹勢および葉色観察)は毎年実施した。葉分析調査は 1969 および 70 年に行い,収量および果実品質調査は毎年収穫時に行った。

6. 適正 N 施用量(標準区,夏肥不施用区)およびその 80%施用量(夏肥減量区)のような施肥条件下では,夏肥分減肥によって樹勢は逐年劣化し,葉色も淡化する傾向がみられたが,N 施用量の減少による収量の明らかな低下はみられず,果実の成熟促進効果も認められなかった。なお,減肥による果実の食味向上も認めなかった。

7. 夏肥の廃止(夏肥減量区,夏肥不施用区)により樹勢は逐年劣化し,葉色も淡化の傾向がみられた。可溶性固形物含量は夏肥の廃止によって低まり,クエン酸含量には変化なく,したがって甘味比は低まり,夏肥の廃止は適正 N 施肥条件下では果実の品質の低下となってあらわれた。